



八幡小だより

北九州市立八幡小学校
校長 田頭 麗宏



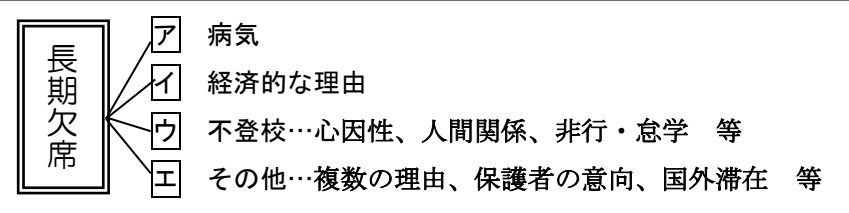
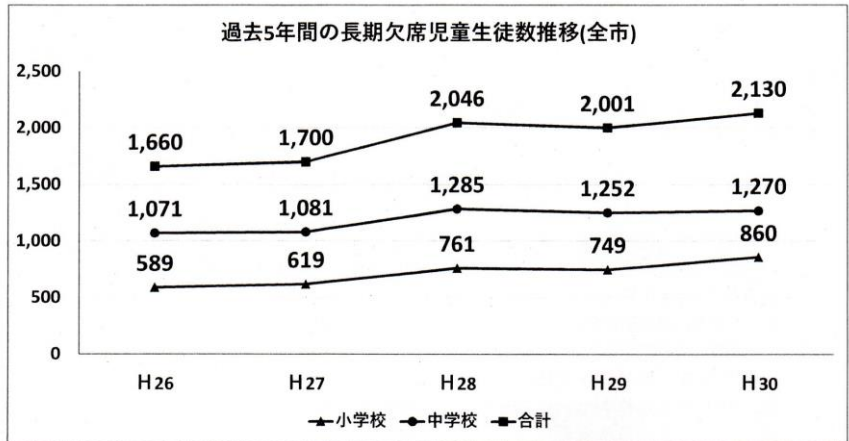
市内で「長期欠席」児童が急増中！

～ 『不登校傾向』や『隠れ不登校』にご注意ください ～

先日、文部科学省から昨年度の「全国問題行動・不登校等調査」の結果が公表されました。国内のすべての学校が、文部科学省に報告した件数をまとめたものです。それに合わせて、北九州市の調査結果も明らかになりました。

その中で、非常に深刻な事態にあるのが「長期欠席児童の急増」です。**長期欠席児童とは、年間30日以上欠席した児童のことを指します。**右のグラフの通り、平成30年度は860人。4年間で271人も増加しています。

一般的に「不登校」というのはよく耳にされると思いますが、「長期欠席」とは違います。文部科学省では、長期欠席の理由を4つに分類しており、そのうちのひとつが不登校なのです。ですから、入院などで30日以上欠席した場合は「長期欠席だが不登校ではない(理由ア)」児童に分類されます。もちろん、こうした長期欠席は残念ですが仕方がない状況と言えます。



問題なのは、不登校(理由ウ)とはされていない児童の中に、『不登校傾向児童』や『隠れ不登校児童』が存在していることです。

『不登校傾向児童』というのは、不登校になりかけていたり、今後なってしまう可能性が高かったりする児童のことです。例えば、毎週月曜日になると頭痛や腹痛などを訴えて欠席する児童は、年間だと欠席日数がゆうに30日を超えます。つまり、長期欠席児童(理由ア)として文部科学省に報告されます。こうした場合、長期欠席という意識は本人にも保護者にも薄いのです。しかし、病院にも行かず、年間30日以上休むことは、不登校傾向がある長期欠席ととらえるべきです。こうした児童が、学年を重ねるにつれて欠席日数が増えて完全な不登校になりがちであることは、追跡調査からも明らかになっています。

また『隠れ不登校児童』というのは、長期欠席理由がその他(理由エ)になっている場合に考えられます。それは、「複数の理由」の中に不登校が含まれている場合があるからです。例えば、本人がゲームに没頭して昼夜逆転してしまった結果学校に来なくなってもかわらず、保護者が積極的に改善しようとしなければ、複数の理由による長期欠席となり、不登校(理由ウ)ではなく、その他(理由エ)に分類されるのです。ちなみに、平成30年度の小学校不登校児童は181人で、平成29年度の205人から24人減っています。小学校長期欠席児童は111人も増加したのですが・・・この差の裏には、『隠れ不登校児童』の存在が考えられないでしょうか。

いろいろ書きましたが、「うちの子は毎月3日くらい欠席するけど、休み続けていないので不登校ではない。大丈夫!」というのは認識違いだ、ということをお伝えできたらと思います。30日を超えると「長期欠席」ですし、『不登校傾向児童』や『隠れ不登校児童』かもしれないからです。ぜひご家庭で、「あゆみ」の欠席日数をしっかり確かめていただきたいと思います。理由とはもあれ、長期欠席はさまざまな点でマイナスになる可能性が高いと言えます。まずは、その日の子どもの状況を見て、欠席させることが適切なかどうか、保護者の皆様のご判断が重要です。よろしくお願いいたします。

